

宜野湾高校の生徒達へ（83）

2021.2.18

『宜野湾高校の生徒達へ(G1S)(78)』で普天間問題を取り上げたが、日米安全保障体制に触れることができなかった。今回は、寺島実郎氏や故翁長雄志前沖縄県知事等の発言をもとに考えてみることにしよう。寺島氏は、沖縄基地問題と日米安全保障体制について次のように述べている(琉球新報:11.25 から一部引用)。

日本と同じ敗戦国のドイツは冷戦が終わり、米軍基地の段階的縮小、地位協定改定に踏み切り、米軍依存から脱却し、独立国家としての位置を確保した。日本は日米関係をどうしたいか。国内全ての米軍の基地や施設、空域を東アジアの安全保障に不可欠なものに絞り込み何年かけてでも、段階的に縮小するスタンスを見せるべきだ。



上の寺島氏の発言を別の記事で補足する(琉球新報:2015.9.18 より一部引用)。

ドイツは米国と戦略対話を行い、ドイツ国内の全米軍基地を全部点検し、米軍基地を四分の三縮小し、地位協定の改定に踏み切っていた。

故翁長雄志前沖縄県知事は日本の安全保障について、次のように語っていた(『沖縄と本土』2015)。

これは本土の方々にはなかなか理解してもらえないことなのですが、一つは日本の安全保障は日本国民全体で考えて負担してもらいたい、ということです。沖縄で知事選などに出来ますと、本土から来る方が「あなたは日米安保体制に反対なの？」と言うんですね。

「いや、賛成ですよ」と答えると、「なぜ、賛成なのにオスプレイの配備を認めないの？基地を認めないのか」という話をするんですね。そこで、私が「それでは、本土の人に日米安保体制に反対なんですか」と聞くと、「いや、賛成が多いよ」と。「ではなぜ、米軍基地本土に置かないんですか」と聞くと、少しはお互いの乖離が縮まってきます。



さて、なぜだろう、と考えてくれるからです。

ここで11月に逝去した作家の大城立裕氏は沖縄基地問題をどう考えたかを触れてみたい。大城氏は沖縄初の芥川賞作家で長年、沖縄文学を牽引し、沖縄とは何かを問い続けた(琉球新報:10.29 から一部引用)。

2011年に発表した「普天間よ」は移設問題で揺れる米軍普天間基地を正面から取り上げている。「なぜ普天間がわれわれにとって問題かといえば、やはりアイデンティティーの問題だろう。基地によって奪われた自分を取り返そうということだ」と語っている。

これに関連して大城氏は、佐藤優氏との対談で次のように述べている。(波 2011年7月号から一部引用)

★「普天間よ」で書いたのは、アイデンティティーの問題です。あの、今は基地になっている土地にあるはずの自分の櫛を取り返そうとしたおばあちゃんもそういう自分を持っています。

★「普天間よ」には、次の世代の娘も登場しますが、轟音の中で踊り続ける姿に、いまの世代のアイデンティティーを守りたい、という想いを反映させているつもりです。



大城氏は、沖縄の歴史についての次のように述べている(朝日新聞:11.28 より一部引用)。

◎1879年、琉球王国が日本の統治下に組み入れられ、沖縄県となった「琉球処分」以来、「本土による差別に対し、同化を深めることで乗り越えようとしたのが沖縄の歴史でした」。

◎「(本土への)同化と異化のはざままで揺れ動いているのが沖縄の心」が持論だった。近年は独自のアイデンティティーを求める「異化が強まっている」。

「同化」と「異化」について、別の記事では「日本に対する劣等感から来る同化志向に対し、独自のアイデンティティーを求めるのが『異化』である」(琉球新報:10.29)と書いている。

大城氏は冒頭で触れた日米地位協定について、次のように述べている。「米軍人・軍属の事件・事故について日本側の裁判権を制限する日米地位協定は一度も改定されぬまま。半世紀前、『カクテル・パーティ』で描いた米兵の性的暴行を裁けない状況と『一皮むけば同じ』」。

さて、「普天間よ」は50ページほどの中編だ。大城氏の発言を念頭に「普天間よ」を読み、普天間問題について考えてみることも主権者として必要なことではなかろうか？